

日本語学習者の 勧誘表現に現れる音声的特徴

——「飲もう」の場合——

尹 英 和

1. は じ め に

中級・上級になると、学習者は学習項目の増大とともに多様な場面に直面する。学習者は習得した学習内容の中から、多様な場面に対応しようとするが、時には予期しなかったコミュニケーションギャップが、人間関係にまで影響を及ぼすことがある。ある韓国語を母語とする日本語学習者（以下学習者）の報告によると、友人に「食べに行こう」と誘いの声をかけたが、日本語母語話者（以下母語話者）はそれを独りごとと聞き取り何も答えなかったという。勧誘という言葉行動は承諾であろうが、断りであろうが返事があるのが普通であり、返事をもらえなかった学習者は大変気まずい思いをしただろう。このエピソードの発端は意向形を使う勧誘表現であったことにあると思う。松岡（2000）は、意志表現において自分がある行為をする意志があることを聞き手に伝える場合には「と思う」を付けて使うのが普通であり、意向形「う/よう」を単独で使う意志表現は話者の心の中で起きることが多く、相手を意識しない独りごとになるというが、このときの母語話者は学習者の発話を、相手を意識した「聞こえよがしの

* 本学兼任講師

キーワード：勧誘表現，意向形「う/よう」，学習者，音響分析，聴覚実験

ひとりごと」¹⁾の意志表現として聞いたと考えられる。また、学習者の意向形による勧誘には母語話者と異なる音声的特徴があったのではないかと考えられる。

そこで以下では意向形を用いる表現に、意図別にどのような音声、知覚上の特徴があるかを、母語話者と学習者を対象に調べる。特に友人間の会話場面に相応しい普通体の「飲もう」を例にその特徴を調べる。

2. 先 行 研 究

和田（1980）は、東京方言の意向形「う」は先行動詞とともに融合し一つのアクセント単位をなすが、その際、先行動詞のアクセント型に関わらず、「-2」という助動詞自身の規格の型を作り上げるという。また、川上（1963）・和田（1980）は文末に上昇イントネーションを加えれば何でも質問になるというものではなく、文末（句末）の上昇イントネーションの本質は聞き手とのつながりを求める気持ちを表すことにあるという。そして、文末に上昇イントネーションが加わって、語のアクセントが壊れる場合、すなわち浮き上がり調について説明している。浮き上がり調とは、文末から2番目の拍にアクセント核があり、また、その拍と最終拍とが重母音・長母音をなす「う・よう」「まい」「たい」「だろう」「でしょう」「ほしい」及び「ください」「なさい」などにおいて起きる。また、上昇では、浮き上がり調を除けば、最終の一拍が高くなると述べている。さらに、川上（1963）・和田（1980）では、「反問のイントネーションは文末にしかありえない。相手の言う通りに繰り返して、最終拍の母音を〈ゆっくり上昇〉させ確認するのが反問イントネーションの特徴であるが、〈ゆっくり上昇〉か〈さっさと上昇〉かは程度の差にすぎず、さっさと上昇しても反問であることもある。また、反問が浮き上がり調になることはない。」と述べている。

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴

杉藤（1990）では「見ない」の否定・反問・勧誘のイントネーションの違いに関して述べている。反問と勧誘の発話のピッチ曲線の違いについて、反問では音調の変化が極端であるが、勧誘ではピッチの上昇、下降の程度がわずかであると述べている。

福岡（1998）は中国の4方言（北京・上海・閩東・閩南）出身の日本語学習者を対象に「食べない」の勧誘と否定のイントネーションから、発話者の表現意図が識別できるかを自然音声および合成音声を用いて知覚調査を行なっている。その結果、「日本語の学習早期では、文末のピッチの変動と勧誘の表現意図とを結びつけることが難しく、勧誘を表す文末のピッチの上昇率が知覚上十分に習得されていないことが分かった」と述べている。

蔡（1995）は意向形による意志表現と勧誘表現に現れる「浮き上がり調」の使用実態を男女、世代、気分などの因子に基づいて考察し、〈浮き上がり調〉の使用には男女差、世代差、気分の差があり、意志表現と勧誘表現とは差が見られないという。また、若年層の意志表現と勧誘表現のピッチ曲線の比較で、意志表現の方は穏やかな上昇が見られるのに対して、勧誘表現の曲線の方は急な上昇が見られると述べている。

以下発話調査及び聴覚調査では意向形を用いる表現の「飲もう」に現れる発話及び聴覚上の特徴を、母語話者と学習者との間で比較するが、設定した場面にそって表現・判断してもらう。

3. 発 話 調 査

3-1 調査概要

まず、発話調査の概要について説明する。発話調査では母語話者3名と学習者8名に設定した場面に従って「飲もう」を言ってもらった。母語話者3名は関西方言話者であるが、共通語としての日本語を想定し発話して

〈表1〉 インフォーマント情報（年齢は調査当時）

| 話者 | 性別 | 年齢 | 職業 | 母方言 | 居住地・居住歴 | 学習歴 |
|----|----|----|--------|-------|--------------------|-------|
| N1 | 女性 | 32 | 日本語教師 | 京都方言 | 京都 | |
| N2 | 女性 | 39 | 留学生相談員 | 大阪方言 | 大阪 | |
| N3 | 女性 | 29 | 主婦 | 神戸方言 | 大阪 | |
| S1 | 女性 | 27 | 学生 | ソウル方言 | 大阪2年6ヶ月 | 2年6ヶ月 |
| S2 | 女性 | 28 | 学生 | ソウル方言 | 大阪3年6ヶ月 | 3年6ヶ月 |
| K1 | 男性 | 24 | 学生 | 慶尚南道 | 大阪2ヶ月 | 9ヶ月 |
| K2 | 女性 | 31 | 学生 | 慶尚北道 | 大阪2年 | 10年 |
| K3 | 女性 | 28 | 学生 | 慶尚南道 | 大阪2年6ヶ月 | 5年 |
| K4 | 女性 | 22 | 学生 | 慶尚南道 | 大阪3ヶ月 | 2年6ヶ月 |
| K5 | 女性 | 28 | 学生 | 慶尚北道 | 東京1年 大阪2年6ヶ月 | 8年 |
| K6 | 女性 | 22 | 学生 | 慶尚北道 | 東京1年6ヶ月 大阪2年6ヶ月 | 4年 |

もらった。学習者は日本全国に分布しているし、学習者が教室で習う日本語は各地の方言ではなく、共通語としての日本語である。東京方言の音声的特徴には先行研究も多く、これからは各地の方言話者の音声的特長がcaぶさった共通語としての日本語の特徴も知っていく必要があるだろう。

学習者は、ソウル方言話者2名と慶尚道方言話者6名の計8名である。第二言語習得において学習者の母語の影響のみならず、学習者の母方言の顕著な違い²⁾による影響は無視できないと思うが、今回は学習者の母方言の差、学習歴の差は考慮せず、韓国語を母語とする学習者という枠の中で調査した³⁾。インフォーマントの情報は〈表1〉の通りである。

また、発話調査で設定した場面は以下の3つである。

- ①ひとりごとの意志表現（以下意図①）：誰もいない時、ある行動の選択肢の片方を言葉にする。

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声の特徴

例) 夜遅くのどが渇いてきた。ビールを飲みたくなかったが、翌日早くから授業があることが、少し気になる。飲むか飲まないか少し迷った後、軽く「飲もう」と言ってください。

②聞こえよがしのひとりごとの意志表現 (以下意図②) : すぐそばにいる人にこれからの自分の行動を分かってもらおうとする時。

例) 研究室の冷蔵庫にジュースがある。体育会の残りで誰でも自由に飲んでいいものだが、一人で飲むのが少し気まずい。ジュースを出しながら、「飲もう」と言ってください。

③勧誘表現 (以下意図③) : 友人を誘う時。

例) ゼミの飲み会、目の前にはたくさんの食べ物とビールが置いてある。友達に飲むことを誘いながら、「飲もう」と言ってください。

意図毎に5回連続して「飲もう」を発話してもらった。音声の収録は2001年8月～9月に、静かな部屋でDATとマイクを用いて行った。DATに録音した音声をパソコンに保存した後、11名の意図別基本周波数及び持続時間を計測した。計測には「SUGI Speech Analyzer」⁴⁾を用いた。以下結果ではK1とK4を除外した9⁵⁾名の意図別の音声の特徴にふれる。

3-2 結果及び分析

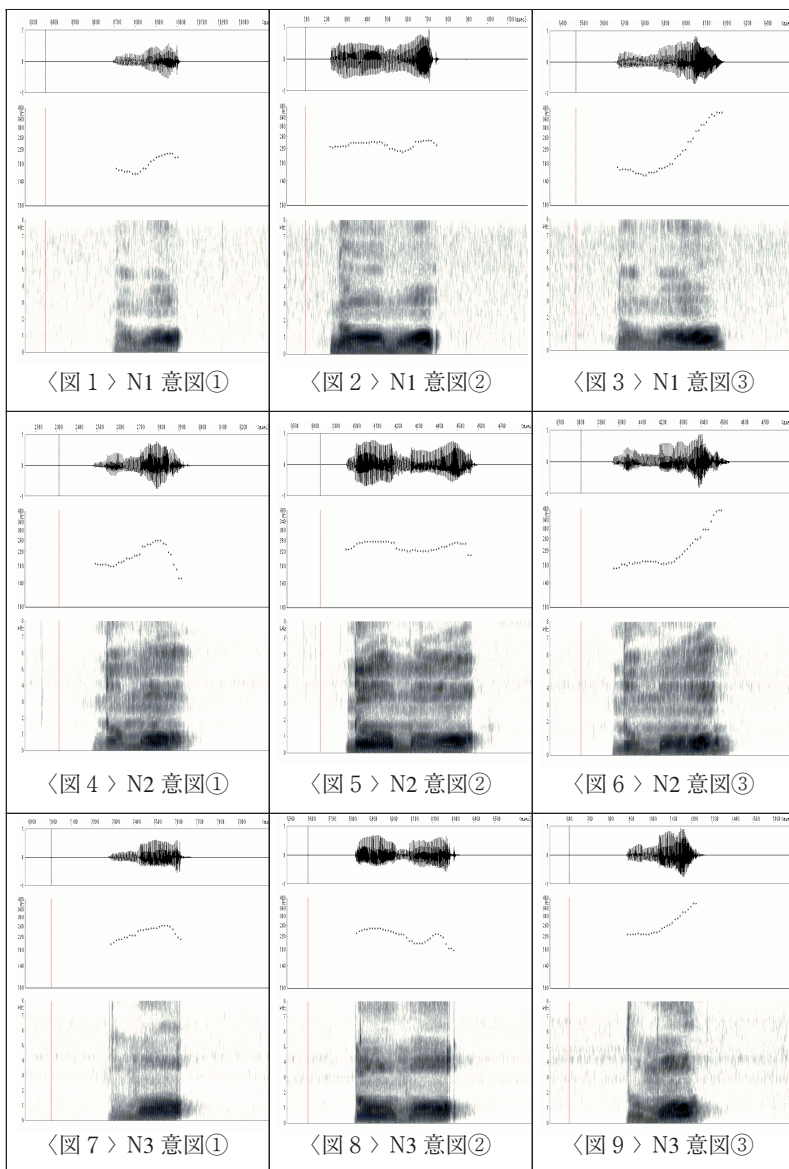
各話者の意図別特徴は〈図1〉～〈図27〉と〈表2〉で提示するとおりである⁶⁾。以下開始値、最高値、H-L (ピッチ幅)、ピッチ曲線、持続時間を中心に分析する。

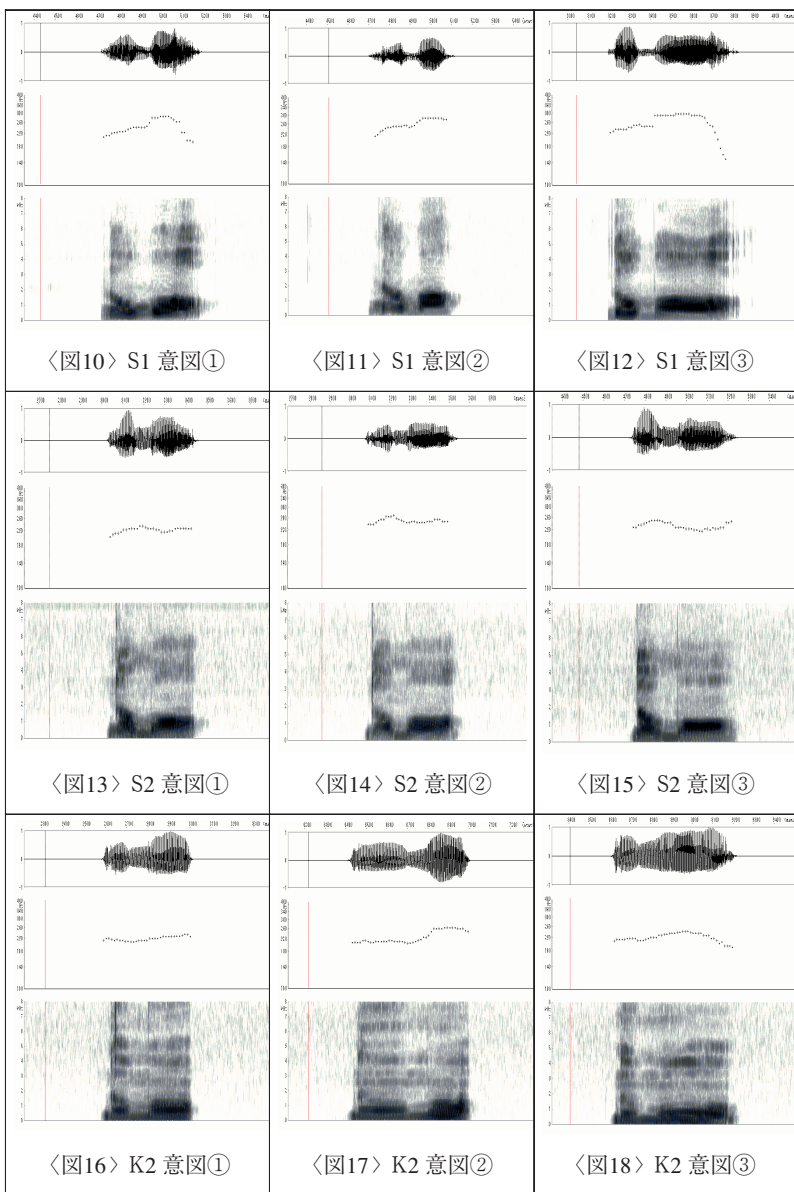
まず、母語話者の特徴をみると、3名とも意図①においては後ろから二番の拍にアクセントの下降があり、その上に自然下降のイントネーションがかぶさっている ((図1, 図4, 図7)。意図②では母語話者3人とも山

〈表2〉各話者の意図別計測の結果

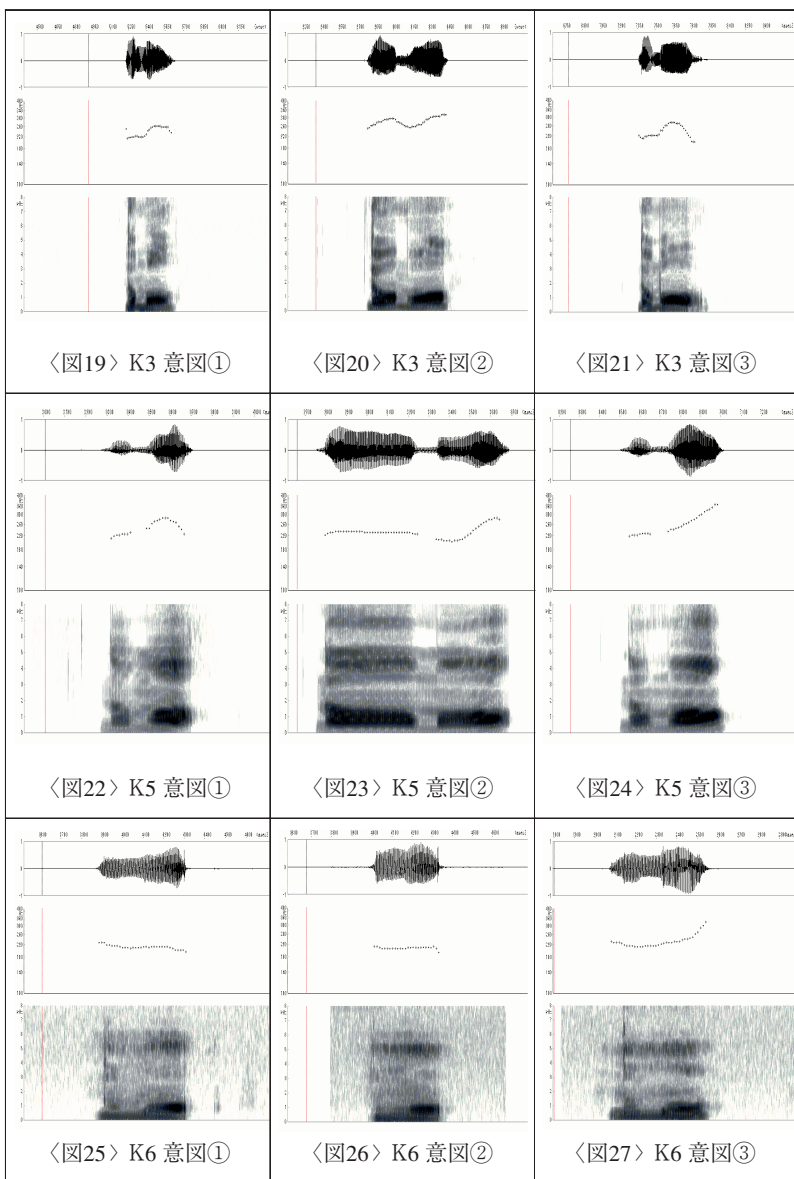
| 区分 | 話者 | 意図 | 開始値 | 最低値 | 最高値 | 終了値 | H-L | 持続時間 | 図番号 |
|------|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 母語話者 | N1 | ① | 165 | 156 | 209 | 198 | 53 | 326 | (1) |
| | | ② | 223 | 212 | 242 | 220 | 30 | 540 | (2) |
| | | ③ | 171 | 162 | | 372 | 210 | 530 | (3) |
| | N2 | ① | 183 | 179 | 257 | 158 | 99 | 478 | (4) |
| | | ② | 224 | 218 | 258 | 203 | 55 | 639 | (5) |
| | | ③ | 176 | 170 | | 386 | 216 | 570 | (6) |
| | N3 | ① | 202 | | 266 | 214 | 64 | 390 | (7) |
| | | ② | 242 | 196 | 252 | 179 | 73 | 520 | (8) |
| | | ③ | 221 | | | 353 | 132 | 394 | (9) |
| 学習者A | S1 | ① | 197 | | 283 | 209 | 86 | 466 | (10) |
| | | ② | 217 | | 283 | 277 | 66 | 396 | (11) |
| | | ③ | 231 | | 290 | 163 | 127 | 602 | (12) |
| | S2 | ① | 204 | 211 | 233 | 224 | 29 | 429 | (13) |
| | | ② | 238 | 242 | 268 | 240 | 30 | 453 | (14) |
| | | ③ | 225 | 218 | 255 | 247 | 37 | 504 | (15) |
| | K2 | ① | 212 | 207 | 187 | 173 | 34 | 418 | (16) |
| | | ② | 208 | 205 | 267 | 247 | 62 | 583 | (17) |
| | | ③ | 219 | | 254 | 189 | 65 | 599 | (18) |
| | K3 | ① | 214 | | 283 | 248 | 69 | 394 | (19) |
| | | ② | 252 | 249 | 294 | 307 | 58 | 645 | (20) |
| | | ③ | 219 | | 296 | 193 | 103 | 506 | (21) |
| 学習者B | K5 | ① | 214 | | 283 | 240 | 69 | 436 | (22) |
| | | ② | 224 | 203 | 275 | 263 | 72 | 963 | (23) |
| | | ③ | 219 | | | 365 | 146 | 520 | (24) |
| | K6 | ① | 220 | 202 | 215 | 221 | 19 | 441 | (25) |
| | | ② | 212 | 204 | | 218 | 14 | 419 | (26) |
| | | ③ | 225 | 215 | | 299 | 84 | 491 | (27) |

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声の特徴





日本語学習者の勧誘表現に現れる音声の特徴



が二つになったイントネーションが特徴的である。言葉遊び的なイントネーションとも言えるが、ピッチの変動はあまり大きくない(図2, 図5, 図8)。意図③においては3人とも上昇イントネーションを用いるという共通点がある(図3, 図6, 図9)。文末上昇のイントネーションは相手とのつながりを求める気持ちを表すという川上(1963)・和田(1980)の説明のように、人を誘い行動をともにすることを目的として行われる勧誘の発話には質問の意味がなくても、上昇イントネーションが共起しやすいだろう。また、意図③のピッチ幅(H-L)は話者により違いがある。N1, N2は200Hz以上もあるが、N3はその半分ぐらいの132Hzである。

意図別の比較では、意図②の開始値は他の意図に比べ高い傾向がある。意図③の最高値の基本周波数が意図①及び意図②に比べて高い。また、持続時間をみると、意図①が一番短く、意図②が一番長い。持続時間が長い順に並べると、意図②>意図③>意図①になる。上昇イントネーションを伴う意図③が上昇イントネーションを伴わない意図①より長い傾向がある。

次に、学習者の場合だが、学習者は2つのグループに分けて考える。意図③で上昇イントネーションが見られるBグループ(K5, K6)と、見られないAグループ(S1, S2, K2, K3)に分類する。

学習者にとって日本語のアクセントの習得は難しく、アクセントが後ろから3拍目にあったり、第一拍目と第二拍目の高さが同じであったりするが、Aグループの学習者の特徴は、意図に関わらず、イントネーションの形状が似ているといえる(図10～図21)。母語話者の場合、意図③では上昇イントネーションを伴うが、Aグループの学習者は上昇イントネーションを伴わない(図12, 図15, 図18, 図21)。

Bグループの学習者K5, K6は意図③の際、上昇イントネーションを用いる(図24, 図27)。しかし、K6のピッチ幅(84Hz)はK5(146Hz)及び母語話者(210Hz, 216Hz, 132Hz)のピッチ幅に比べれば、大きくない。

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴

意図②についてはグループに関係なくほとんどの学習者が母語話者と異なるピッチ変化を見せ、意図①のピッチ変化と似ている。

学習者の持続時間の場合、はっきりした順番は決められないが、グループ・話者を問わず、意図③の持続時間は意図①の持続時間より長い。

〈表3〉音節別持続時間と比率

| 区分 | 話者 | 意図① | | 意図③ | | 比率 (①:③) | |
|----|----|------|-------|------|-------|----------|--------|
| | | [no] | [mo:] | [no] | [mo:] | [no] | [mo:] |
| 母 | N1 | 105 | 219 | 121 | 409 | 1:1.15 | 1:1.87 |
| | N2 | 141 | 336 | 126 | 444 | 1:0.89 | 1:1.32 |
| | N3 | 92 | 297 | 92 | 302 | 1:1.00 | 1:1.02 |
| A | S1 | 171 | 298 | 166 | 437 | 1:0.97 | 1:1.47 |
| | S2 | 147 | 220 | 156 | 348 | 1:1.07 | 1:1.58 |
| | K2 | 125 | 292 | 143 | 456 | 1:1.14 | 1:1.56 |
| B | K3 | 99 | 295 | 106 | 399 | 1:1.07 | 1:1.35 |
| | K5 | 157 | 280 | 157 | 363 | 1:1.00 | 1:1.30 |

〈表3〉は各話者の意図①に対する意図③の音節別持続時間と比率である。各発話の持続時間及び発話速度が異なることを考え、比率で比較を行う。鮎沢(1992)では文末ピッチ上昇の持続時間は1拍分の長さという。しかし、母語話者及びBグループの学習者の話者別特徴を見ると、文末上昇の意図③の場合、上昇しない意図①と比べ持続時間があまり伸長しない話者も、第1音節の持続時間が短くなるなど文末以外の部分に変化がみられる話者もいる。特に文末上昇イントネーションを伴うBグループの学習者の文末持続時間は、Aグループの学習者の文末の持続時間より短い。Aグループの学習者は、意図③で文末上昇イントネーションを伴わないにもかかわらず、意図①に対する意図③の文末の音節の比率がかなり高い。つまり、Aグループの学習者はピッチの高さではなく、文末の持続時間の長短で意図①と意図③を区別していると考えられる。

3-3 まとめ

母語話者はピッチの変化において意図毎に違いを見せている。話者に関係なく意図①はアクセントの下降に自然下降イントネーションがかぶさった発話であり、意図②では山が二つになる独特なイントネーションを用いる。また、意図③では「-2」のアクセント下降が消失したような浮き上がり調の上昇イントネーションになる。持続時間においては話者別違いがあるが、意図②が一番長く、意図③、意図①の順になる傾向がある。しかし、持続時間の変化、特に意図①に対する意図③の持続時間の伸張は上昇イントネーションを伴うための付加的な要素で、日本語の場合、意図①と意図③の区別にはピッチパターンに、より重点が置かれるのではないかと考えられる。

母語話者・Bグループの学習者と異なるピッチ変化を示すAグループの学習者は、持続時間の長さで意図を区別していると考えられる。Aグループのように文末のピッチの変化は見せず、持続時間の長短で意図を区別する場合、意志表現よりやや長いだけの勧誘表現を母語話者が意図通りに把握できなくなる可能性もあるだろう。冒頭で紹介したエピソードは文末の持続時間が長いだけの勧誘表現を母語話者が聞こえよがしのひとりごとと判断し起きたミスコミュニケーションだと考えることができるだろう。

「意図②」について、大部分の学習者は聞いたことはあっても、使ったことはない、母語では同様の表現を用いるが、日本語では表現しにくいと答える。土岐(1983)の指摘にもあるように、日本語での表現の豊かさのため、この点での教育及び学習も必要であると考えられる。また、「聞こえよがしのひとりごと」にはいろいろバリエーションがあり、今回の調査で現れたピッチパターンはそのバリエーションの一つに過ぎないと考えられる。

発話調査の結果、つまり、持続時間及びピッチパターンの違いによる母

語話者と学習者の意図区別の差を、さらに知覚実験により検証する。

4. 聴 覚 調 査

4-1 調査概要

発話調査の際には相手を意識した意志表現（聞こえよがしの意志表現）「意図②」と相手を意識しない意志表現「意図①」とに分けて考えたが、知覚実験では両者を区別せず、「意図①」のみ使用する。聞こえよがしの意志表現にはいろいろなバリエーションがあるだけでなく、聞こえよがしの意味表現を発話しない人もいる。普段使っていない言い方を判断するのは大変選択に困ると思う。従って、知覚実験では「意図①」のみを意思表現として使用する。

調査は2001年11月～12月に行った。知覚調査用の資料は自然音声及び合成音で構成されている。

自然音声は発話調査で用いた各話者の「意図①：意志表現」と「意図③：勧誘表現」の音声である。また、合成音声は段階的に持続時間を延ばしていく音（X合成音）及び段階的に基本周波数を変えていく音（Y合成音）の2種類を用いる。

X合成音は、話者N2の「意図①：意志表現」の音声、〈図4〉をもとに、最終音の[o:]の持続時間を10%ずつ最大180%まで伸ばす。音節の伸長時間には子音の方も変化するが、子音の変化には限度があり、母音ほど知覚に影響を与えないと考えられるので、最終音の[o:]だけを段階的に伸長させる。X合成音の詳細を〈表4〉で提示する。

Y合成音も話者N2の「意図①：意志表現」の音声、〈図4〉をもとに作成する。下降開始点（最高値）の基本周波数262Hzと終了値が平らになるようPARCOR合成したものをY3とする。Y3から下方向で2段階、上方向で4段階、〈図28〉のようにF0（基本周波数）の常用対数を0.1ず

〈表4〉 X合成音の持続時間

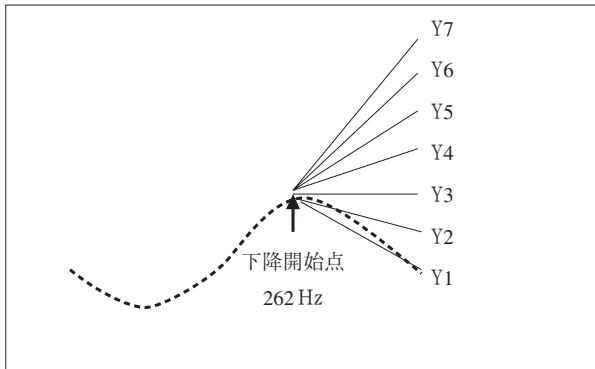
| 番号 | 単位 (ms) | 番号 | 単位 (ms) |
|----|---------|----|---------|
| X1 | 256 | X5 | 345 |
| X2 | 278 | X6 | 356 |
| X3 | 301 | X7 | 376 |
| X4 | 324 | X8 | 394 |

[no]=154 ms, [m]=78 ms

つ等間隔に PARCOR 合成したものを Y1, Y2, Y4, Y5, Y6, Y7 とする。
その終了点の基本周波数は〈表5〉の通りである。

〈表5〉 Y合成音の終了点の基本周波数

| 番号 | Log (Hz) | Hz | 番号 | Log (Hz) | Hz |
|----|----------|-----|----|----------|-----|
| Y1 | 2.21 | 161 | Y5 | 2.61 | 410 |
| Y2 | 2.31 | 207 | Y6 | 2.71 | 516 |
| Y3 | 2.41 | 262 | Y7 | 2.81 | 640 |
| Y4 | 2.51 | 326 | | | |



〈図28〉 Y合成音作成の例

自然音声（9名：N1, N2, N3, S1, S2, K2, K3, K5, K6×2種類の
意図）+合成音（8+7）合わせて33資料であるが、ランダムに配置し3回

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴

聞いてもらったので、判断したのは99回である。

判断者は関西方言話者と関東方言話者と学習者の3つのグループに分かれている。その詳細は以下の通りである。

| | |
|--------|--|
| 関西方言話者 | 関西在住の大学生112名。言語形成期，小・中・高校時代を関西地域で過ごした人。 |
| 関東方言話者 | 関東在住の大学生39名。言語形成期，小・中・高校時代を東京都一帯で過ごした人。主に東京都・千葉県・神奈川県の出身者。 |
| 学習者 | 関西在住の日本語学習者47名。20代，30代。日本滞在歴は約3ヶ月から4年まで，学習歴も6ヶ月から4年までと個人差が大きい。 |

また，判断は「意志：自分の意志，決意を表明する発話」，「勧誘：友達を誘う発話」，「反問（問い返し）」⁷⁾：相手の発話をオウムのように繰り返す，「確認する発話」の中から強制判断してもらった。

4-2 結果及び分析

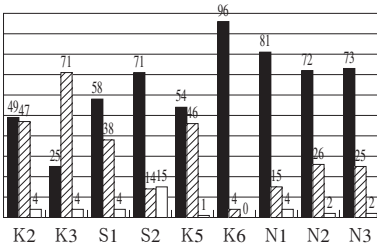
強制判断である上，答えにはゆれがあり得ると思うが，結果を判断グループ別にまとめる。自然音声に対する判断の結果は棒グラフで提示し，棒グラフは左から順に「意志：黒」「勧誘：斜線」「反問：白」と判断した割合が示されている。合成音声に対する判断の結果は線グラフで提示するが，「菱形」が「意志」，「四角」が「勧誘」，「三角」が「反問」となり，数値とともに示されている。

4-2-1 関西方言話者

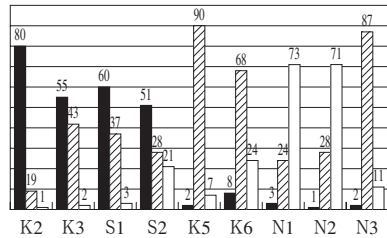
関西方言話者の結果を〈図29〉～〈図32〉で示す。各話者の特徴については〈表2〉と発話調査の結果を参照のこと。

まず，〈図29〉をみると，各話者の意志表現（意図①）に対し関西方言話者が発話意図の通りに判断した率（以下判断の一致率）が70%以上であるのは，S2，K6，N1，N2，N3である。判断の一致率が一番高かったの

はK6である。学習者K6の意志表現（意図①）は他の話者に比べ、ピッチの幅が狭く、小さくつぶやくような声であったので、「意志」という判断率が高かったと思う。また、関西方言話者はK3を意図と異なる勧誘と判断する割合が高い。学習者K3の意図表現はピッチ幅が69Hzであり、開始値が214Hzで高い方である。



〈図29〉各話者の意思表現に対する
関西方言話者の判断

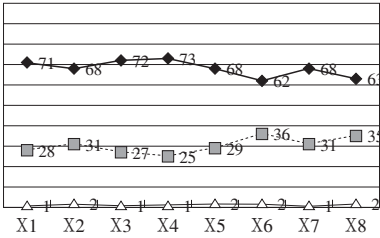


〈図30〉各話者の勧誘表現に対する
関西方言話者の判断

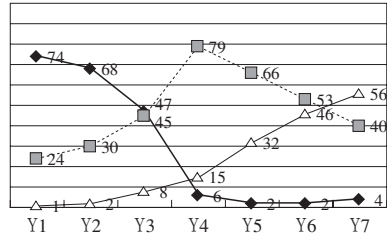
次に〈図30〉をみると、各話者の勧誘表現（意図③）に対する関西方言話者の判断の一致率が高いのは、K5、K6、N3である。学習者K5、K6の勧誘表現、母語話者N3の勧誘表現は上昇イントネーションを用いる。開始値が高く、上昇のピッチ幅（H-L）が100Hz程度ある。同じ上昇イントネーションを用いる母語話者N1、N2の勧誘表現に対しては「反問」の判断率が「勧誘」を上回る。N1、N2は判断の一致率が高いK5、N3の2倍の200Hz以上のピッチ幅を用い、開始値も低いという共通点がある。持続時間の伸長によって意図を区別するAグループの学習者S1、S2、K2、K3の勧誘表現に対する判断では「意志」という回答が「勧誘」を上回る。

X合成音に対する関西方言話者の判断の結果は〈図31〉のとおりである。一番上の折れ線が「意志」、2番目が「勧誘」、3番目が「反問」であるが、ほぼ横一直線で大きな変わりはない。つまり、後ろから二番目にあるアク

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴



〈図31〉 X合成音に対する関西方言話者の判断



〈図32〉 Y合成音に対する関西方言話者の判断

セントの下げに従うピッチパターンから持続時間だけを長く変えても関西方言話者は「意志」と判断する。

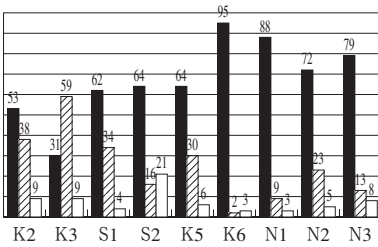
Y合成音に対する関西方言話者の反応の結果〈図32〉をみると、先ず元のピッチパターンに一番近いY1では「意志」の判断が74%である。Y1から基本周波数が上がるにつれ「意志」の判断が下がり、Y3で「意志」の折れ線と「勧誘」の折れ線が交差する。Y3以降、基本周波数が上がっていくにつれて「意志」という判断は激減し、「勧誘」という判断が上がっていく。しかし、Y5以降になると「勧誘」の判断が減少し、「反問」という判断が増加していく。基本周波数の上げがY7段階になると、「勧誘」と「反問」の判断の交差が起き、「反問」の判断の割合が一番高くなる。

つまり、「意志」あるいは「勧誘」を判断する際に関西方言話者は持続時間より基本周波数の変化で意図を区別する。アクセントの下げがある音声に対しては「意志」であると判断し、上昇のピッチ変化の音声に対しては「勧誘」であると判断する。但し、上昇のピッチ幅が広い音声に対しては「反問」であると判断する傾向がある。

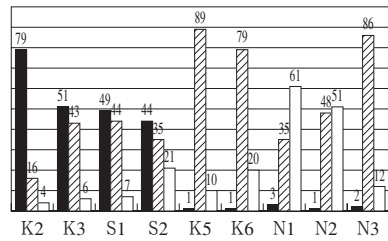
4-2-2 関東方言話者

関東方言話者の結果を〈図33〉～〈図36〉で示す。全体的に関東方言話者

は、関西方言話者と同じ傾向を見せるが、[K5 意] [N2 勧] [X7] [X8] [Y2] の判断に対しは、「 χ^2 独立性の検定」によって危険率0.1%で有意差 (χ^2 値>13.815) があつた。



〈図33〉各話者の意志表現に対する
関東方言話者の判断

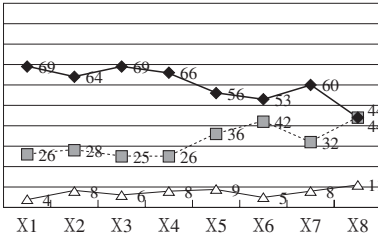


〈図34〉各話者の勧誘表現に対する
関東方言話者の判断

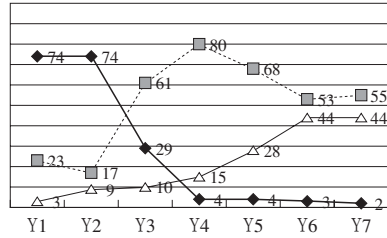
[K5 意] は関西方言話者よりも関東方言話者の方が判断の一致率が高い。上昇イントネーションを用いる [N2 勧] に対する「反問」という判断率が、関西方言話者より関東方言話者は低い。関東方言話者のX合成音に対する判断の結果〈図35〉をみると、[X1] で一番上が「意志」、2番目が「勧誘」、3番目が「反問」である。関東方言話者は最終音([o:])の伸長により、「意志」の判断率が減り、「勧誘」の判断率が上がっていく。それで、元の音声より最終音が80%長くなった[X8]では「意志」の判断率と「勧誘」の判断率が一致する。関西方言話者による判断では「意志」の折れ線と「勧誘」の折れ線がほぼ平行であった。しかし、関東方言話者による判断では[X8]で判断が交差する。[X7] [X8]で見られる関西方言話者と関東方言話者間の有意差はこの差を反映していると思う。[Y2]では関東方言話者の判断の一致率が関西方言話者より高い。

関東方言話者は、関西方言話者と近似した結果を示すが、関西方言話者と違って持続時間の変化も意図区別に関係している可能性が考えられる。

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴



〈図35〉 X合成音に対する関東方言話者の判断

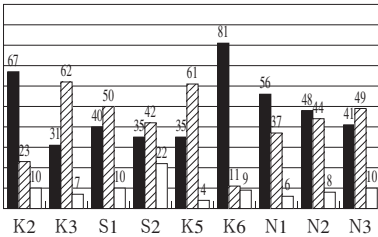


〈図36〉 Y合成音に対する関東方言話者の判断

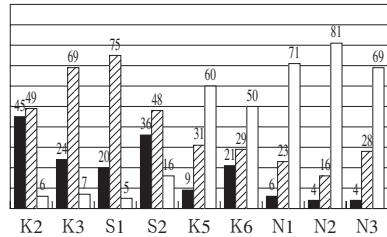
持続時間に対する日本語母語話者間の判断の方言差については機を改めて調べてみたい。

4-2-3 学習者

学習者の結果を〈図37〉～〈図40〉で示す。



〈図37〉 意志表現に対する学習者の判断

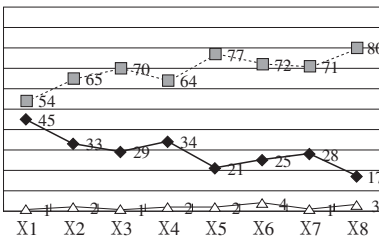


〈図38〉 勧誘表現に対する学習者の判断

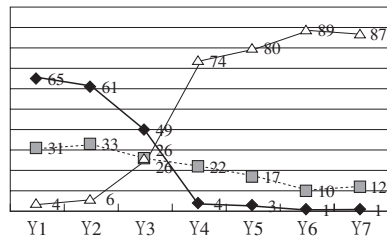
まず、〈図37〉をみると、学習者は母語話者に比べ判断の一致率が低い。各話者の意志表現に対する学習者の判断の一致率が50%以上であるのはK2, K6, N1である。K2とK6, N1は他に比べピッチ幅が狭いという共通点がある。学習者の意志表現に対する判断では「勧誘」の判断率も高い

が、特に K3, S1, S2, K5, N3 に対する判断では「勧誘」の判断率が「意志」の判断率を上回る。

次に各話者の勧誘表現に対する学習者の判断〈図38〉を見ると、Aグループの学習者の発話 S1, S2, K2, K3 に対する判断では、判断の一致率が「意志」の判断率を上回る。しかし、文末上昇イントネーションを伴う発話 K5, K6, N1, N2, N3 に対しては発話意図と異なる「反問」の判断率が「勧誘」の判断率を上回る。



〈図39〉 X合成音に対する学習者の判断



〈図40〉 Y合成音に対する学習者の判断

X合成音に対する母語話者（関西方言話者，関東方言話者）の判断では、一番上の折れ線が「意志」、2番目が「勧誘」、3番目が「反問」であったが、X合成音に対する学習者の判断〈図39〉では上から順に「勧誘」「意志」「反問」である。X1からX2, X3へ最終音が長くなるにつれ、学習者の「勧誘」の判断率はさらに高くなる。

Y合成音に対する学習者の判断の結果〈図40〉では、終了点の基本周波数が平らか下降点の基本周波数（262 Hz）より低いY1, Y2, Y3に対しては「意志」と判断する傾向があるが、下降点の基本周波数より高いY4, Y5, Y6, Y7に対しては「反問」と答える率が高い。基本周波数を上げて行くにつれ、「反問」と判断する率もだんだん上がって

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴

いく。

学習者と関西方言話者及び関東方言話者との「 χ^2 独立性の検定」で、[K3 意] [N1 勧] [Y1] [Y2] では有意な差が認められた。[K3 意] に対しては3グループとも勧誘の判断率が高いという共通点があるが、その割合に差が見られ、[N1 勧] に対しては他のグループに比べ反問の判断率が高い。[Y1] [Y2] に対しては意志の判断率が母語話者に比べ低い。

「意志」あるいは「勧誘」であるかを判断する際、学習者は持続時間の変化で意図を区別する。基本周波数の変化も意図区別に関係しているが、文末ピッチ上昇の変化に対しては母語話者と異なる判断をする傾向がある。つまり、母語話者は上昇のピッチ幅が広い [Y6], [Y7] で「反問」であるとする判断率が高くなるが、学習者は上昇のピッチ変化を示す [Y4] から「反問」の判断率が高く、基本周波数を上げていくにつれ、さらに上がっていく。

4-3 まとめ

関西方言話者・関東方言話者・学習者の特徴をまとめると、以下の〈表6〉のようになる。

〈表6〉各判断者の判断の特徴

| 音声的特徴 | 関西方言話者 | 関東方言話者 | 学習者 |
|---------------------|--------|--------|-----|
| ① 「-2」アクセントの下降 | 意志 | 意志 | 意志 |
| ② ①から持続時間の伸張 | 意志 | 意志△ | 勧誘 |
| ③ 浮き上がり調+上昇イントネーション | 勧誘 | 勧誘 | 反問 |
| ④ ③から上昇幅の拡大 | 反問 | 反問 | 反問 |

5. 考察及び今後の課題

今回発話調査を行った母語話者は関西母言語者で、共通語としての日本

語を想定し発話してもらった。つまり使いなれている関西方言ではなく、よその言葉（東京方言）で話してもらったわけであるが、これにより発話には少し力が入り、これがN1・N2の「勧誘表現」のピッチ幅の拡大へ、さらに反問という知覚調査の結果へまでつながったと見られる。

母語話者・学習者を問わず、【-2のアクセントの下降+自然下降調（平調）】を「意志表現」として発話し、聞き取っている。蔡（1995）は意志表現でも浮き上がり調を用いるというが、今回の調査では意志表現に浮き上がり調は見当たらなかった。もし、意志表現で浮き上がり調を用いるならば、それは相手を意識した場合で、誰もいない場合は、アクセントの下降に従った自然下降調（平調）が普通ではないかと考えられる。

大部分の学習者は基本周波数の上げではなく、持続時間の変化で「勧誘表現」を表し判断している。持続時間が長くなるだけの「勧誘表現」は、母語話者に「意志表現」として判断されやすい。

今回の調査では学習者の学習歴等、滞在歴等を最初から分類せず、調査の結果からA、Bの2つのグループに分けたが、勧誘表現において母語話者のようなピッチ変化をみせるBグループの学習者が2名いた。この2名は慶尚道出身、東京滞在の経験ありの共通点がある。果たして、学習者の母方言及び滞在地が発音能力に影響しているのか、今後さらなる検証が必要であると考えられる。

浮き上がり調が反問になることがないという先行研究とは違って、母語話者はアクセントの下降が消失したような、さらにピッチ幅が広い上昇イントネーションの発話を「反問（聞き返し）」と判断する。果たして浮き上がり調にかぶさったピッチ幅が広い上昇イントネーションが反問になれるかどうか、また、反問であると判断する第一要因が、和田（1980）のとおり最終音節の持続時間なのか、杉藤（1990）のとおりピッチ幅なのか、また、開始点の基本周波数が判断に影響を及ぼしているかどうか、今後さ

らなる調査が必要であろう。

また、今回の調査では男女差は考慮しなかった。質問文における上昇イントネーションの使用の度合いに性差があるように、勧誘の際上昇イントネーションを伴うことは女性に顕著な現象で、男性であれば上昇しない可能性もある。蔡（1995）でも意向形による意志表現と勧誘表現に現れる「浮き上がり調」の使用実態で、〈浮き上がり調〉の使用には男女差、世代差、気分の差があると報告している。今後は、男女差などの要因も考慮した調査が必要だと考えられる。

イントネーションの記号論について述べた杉藤（1990）によると、「イントネーションの変化は感情表現のみならず意味の違いを担い、それらには共通のパターンがある。つまり、アクセントに意味の相違による型があるようにイントネーションにも型があって、文の意味を規定し記号として役立つ場合がある」と述べている。また、この場合、各言語に比較的共通な感情表現とは異なり、固有の文化を背景にするものであるから、例えば日本語教育のためにもコミュニケーションを円滑に行なうべく個々の例について記述する必要があると述べている。

コミュニケーションは相互作用である。円滑なコミュニケーションのため、一方の特徴だけでなく、双方の特徴に関する情報が必要である。今回の調査はコミュニケーションを行う双方に情報源として役立つと思う。つまり、学習者には日本語の勧誘表現にはピッチ幅が広くない上昇イントネーションが必要だという情報を提供し、また、母語話者には外国人学習者の音声的特徴を分かってもらうことにより、コミュニケーションしようとする理解の幅を広げることができると思う。

謝辞：調査に協力してくださった方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。

注

- 1) 土岐(1983)は、目の前の相手に話の内容を分かってもらうことを狙って「聞こえよがしのひとりごと」とでも呼ぶべきものも考えられると述べている。特にこれなどは一つの表現方法として確立し得るものであり、「表現のかたち」という観点から考えるからにはおのずとこの辺りに力点がおかれるという。
- 2) 福井(2001)によると、韓国方言は大きくピッチアクセントが存在する方言と弁別性をもったピッチアクセントを持たない方言に二分される。慶尚南北道、北朝鮮の咸鏡道の方言はピッチアクセントが存在する方言に属し、ソウル、京畿道、忠清道、済州道及び北朝鮮の咸鏡道以外の地域の方言はピッチアクセントをもたない方言に属するという。
- 3) 今回の調査では学習者の学習歴、滞在歴等を最初から分類せず、結果からA、Bの2つのグループに分ける方法を取った。これは経験上、学習者の発話能力が文法や語彙力、学習歴、滞在歴等と必ずしも一致するものではないと判断したからである。
- 4) “SUGI Speech Analyzer”は大阪大学日本語学研究室のものを使用した。
- 5) 居住歴が短く、男性のK1及び居住歴が短いK4を除き、女性9名による結果を示す。
- 6) 〈図1〉～〈図27〉は持続時間が平均値に近い発話を選び、音声波形・ピッチ曲線・広帯域スペクトログラムの順に提示する。発話を含む全体の持続時間が約1200msになるように、また、基本周波数を100Hzから400Hzまで対数で表示する。また、〈表2〉の値は5回の発話の平均値であり、持続時間の単位はms、その他の計測値の単位はHzである。
- 7) 2～3名の学習者に上昇を伴う勧誘表現を聞いてもらった結果、「反問」という答えがあった。これは疑問文のように上昇イントネーションを伴うためであろう。母語話者と異なる学習者の判断の特徴として予想されるので、「反問」を選択肢に含める。

《参考文献》

- 安達太郎(1989)「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』8巻8号 PP 30-40 明治書院
- 鮎沢孝子(1991)「諸言語話者による日本語問い返し文の韻律的特徴」『日本語

日本語学習者の勧誘表現に現れる音声の特徴

- 音声』研究成果報告書 6
- _____ (1992)「日本語の疑問文の韻律的特徴」『日本語の韻律に見られる母語の干渉 (2)——音響音声学的対照研究——』文部省重点領域研究『日本語音声』D1 班研究成果報告書
- _____ (1993)「日本語学習者の発話における母語の韻律の干渉」『日本語音声』D1 班平成4年度研究成果報告書
- 桶口文彦 (1992)「勧誘文——しよう, しましよう——」『言葉の科学』PP 175-186 むぎ書房
- 川上夔 (1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』第16号 PP 25-46 大和文庫
- 杉藤美代子 (1990)「日本語と英語のアクセントとイントネーション」『講座日本語と日本語教育3日本語の音声・音韻 (下)』PP 349-378 明治書院
- _____ (1992)「イントネーションの記号論」『文化言語学その提言と建設』P 1068-1055 三省堂
- 土岐哲 (1983)「ひとりごと」『講座日本語の表現3 話しことばの表現』PP 98-106 筑摩書房
- _____ (1998)「アクセントの下げとイントネーションの下げ」『阪大日本語研究』10 PP 53-66
- 福井玲 (2001)「韓国語のアクセント」『音声研究』5巻1号 PP 11-17 日本音声学会
- 福岡昌子 (1998)「イントネーションから表現意図を識別する能力の習得研究——中国4方言話者を対象に自然・合成音声を使って——」『日本語教育』96号 PP 37-48
- 松崎寛 (1999)「韓国語話者の日本語音声——音声教育研究の観点から——」『音声研究』3巻3号 PP 26-35 日本音声学会
- 和田実 (1980)「アクセント・イントネーション・プロミネンス」徳川宗賢編『論集日本語研究2アクセント』P 294-268 有精堂
- 蔡雅芸 (1995)「東京語話者に見られる文末の「浮き上がり調」について——「意志表現」と「勧誘表現」の場合——」『日本語学科論集』第5号 PP 25-36 東北大学文学部
- 国立国語研究所 (1960)『話し言葉の文型 (1)——談話資料による研究——』国立国語研究所報告18 秀英出版

国際文化論集 No43

松岡弘監修 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク

Phonetic Features of Japanese Invitation Expressions Used by Korean Learners —The Case of “*Nomo*”—

YOON Younghwa

Features of speaking and hearing was investigated using the will form “*Nomo*”.

In the speaking investigation, the Japanese speakers and the Korean Learners (students) spoke the phrase in three different intentions - “a will expression of a soliloquy”, “a will expression which is meant to be heard”, and “an invitation expression.” While the Japanese speakers spoke the phrase distinguishing among three intentions, students could not distinguish them. Although some students in Group B used rising intonation, most students in Group A did not. When students in Group A used invitation expression its temporal duration became long.

In hearing investigation, the listeners were forced to judge between “will”, “invitation”, and “asking in return.” The data of hearing investigation consist of synthetic sounds with varied temporal duration and fundamental frequency of the sound of one Japanese speaker’s “will utterance”, and “will utterance” and “invitation utterance” of each speaker was obtained through speaking investigation. The Japanese speakers (both Kansai dialect speakers and Kanto dialect speakers) judged both the “will utterance” of each speaker and the “invitation utterance” of the Group A students as “will.” Moreover, a sound with the rising wide pitch width was judged as “asking in return.” Although the difference between the two dialects showed a little change in the judgment of the changed temporal duration, there was no change in other judgments. In the judgment of the changed fundamental frequency, a sound with rising

intonation was judged as “invitation”, and one without rising intonation as “will.” A sound with a wide pitch width was judged as “asking in return.”

Although the Korean students also judged each speaker’s “will utterance” as “will,” their rate of judgment was lower than that of the Japanese speakers. There was a tendency to judge “invitation utterance” of the Group A students as intended. When the temporal duration was shortened, it was judged as “will,” and when it was lengthened, it was judged as “invitation.” In the judgment of the changed fundamental frequency, when the direction of pitch change was a descent, it was judged as “will”, and when rising, it was judged as “asking in return.”